

各地の取り組み紹介 沖縄県うるま市

地域の子育て子育ての支援を

「NPO法人りんく・いしかわ」代表 山城 康代

子育て子育て支援サークルを発足

私が住んでいる沖縄県うるま市は、7年前に2市2町で合併し11万9千人の市となりました。沖縄本島中部に位置しています。合併前は石川市という人口2万人の小さな市でした。平成14年当時、子育て支援センターも児童館もなく、親同士の交流の場がどこにもありませんでした。私も隣の市から嫁いできて、友人もなく子育て中はノイローゼになりかかり、子育てが楽しく誰にも頼れず相談もできない苦しさを抱えていました。長女が2歳の時保育園に入所してからママ友達もでき、やっと子育てが楽しいと感じられるようになりました。

そんな中、市で子育てアドバイザー講座が開催され、終了後、行政の担当者Kさんに口説かれ、修了者6名で「子育て子育て支援サークル りんく・いしかわ」を立ち上げました。「りんく」はインターネットのようにリンクすればどこでも繋がるところから、いろんな所・人とつながり、親の子育てを支援し、子どもの居場所づくりをしていきたいとの思いをこめて名づけました。けれども資金もなく、集まる場所すらなかった私たちに「行政ができる事は手助けするから」と会議をする場所を提供してもらい、市のバスも借用したりしながら、自分たちが今すぐできる支援を考えようということになり、市内の企業見学会やエコツアー、夏休み宿題片づけ隊と毎月1回の活動を1年間続けてきました。

児童館でもっと子どもと関わりたい

しかし「毎月1回の居場所づくりをするのも楽しいけれど、もっと子どもたちに関わりたい」と思うようになりました。「児童館があったら子どもとも関わられるし、すばらしい居場所になる」との思いから、「児童館市民フォーラム」を開催しました。講師料を払えませんが、というずうずうしい依頼にもかかわらず「子どもたちのためなら」と講師をひきうけてくださった先生や市長、行政が参加してのフォーラムに100名余の市民が参加し、行政に対し要請ではなく一緒に考えるフォーラムになり、1週間後には「児童館を建てたい」と行政から声がかかり、児童館建設が進むことになりました。

子育て支援アドバイザーとして

その翌年、子育て支援アドバイザーとして、市に勤務することになりました。「子育てお助けブック」を作成し、市のホームページへ「お助けネット」をつくり、公園や保育園、相談機関など乳幼児期の子どもを持つ親が必要だと思われる情報を発信するとともに、家庭相談員と、虐待防止ネ

ットワークへも関わることになったのです。育つ環境を選ぶ事ができない子どもたちの実態や苦しさを目の当たりにし、こんなに近くに大変な養育環境で育っている子どもたちがいる事に衝撃をうけました。「児童館はぜひ必要だ」と本当に強く感じたのはこの時でした。児童館フォーラムから、設計・建設まで関わり、完成した児童館

はまるで自分の家のような気がしましたが、まさか運営まですることになるとは思いませんでした。この年に市が児童館の運営を指定管理者に任せてくれるという事になり、NPO法人を取得し児童館運営をする準備を始めました。

児童館運営がスタート

平成17年に合併し、待ちに待った児童館がオープンしました。ニックネームを子どもたちから募集し、どんな事にもチャレンジしよう「チャレンジ館」と名づけました。平成19年には指定管理者として、市内児童館3館(内学童クラブ併設館2館)を運営していくことになりました。児童館は0歳~18歳までの児童が無料で利用できる場所です。午前中は乳幼児を連れた親子が集い、午後には「ただいま~」と元気よく子どもたちが帰ってきます。午前中のプログラムでは毎週木曜日を「びよびよクラブ」とし、親子ふれあい遊びや造形遊びをとりいれ、遠足やママカフェなど親子が楽しく交流できる場として利用してもらっています。

先月行われた「チャレンジ館まつり&ハロウィン仮装行列」ではお母さんたちが食べ物のブースを出し、お父さんたちが前日の草刈や提灯の飾り付けをしてくれました。ハロウィンは近くのイオンタウンという商店街を90名近くの子供たちと仮装をして歩きながら、お菓子をたくさんいただきました。(もちろん事前をお願いしておくのですが)近くの児童デイサービスの子供たちも20名ほど参加し、楽しいハロウィンを過ごしました。毎月第3木曜日は、ゆんたく(おしゃべり)広場「さくらんぼ」を開催しています。「さくらんぼ」は発達障がいの子供を抱えた親の会で、発達障がいとダウン症の子供を抱えながら、



BPは子育てが初めての親にとってとても大切なプログラム

活発に活動を展開しているKさんが会長になり、お茶やコーヒーを飲みながら子どもの事だけではなく、自分が抱えている悩みや疑問などを話せる場となっています。帰る時には少しでも気分がほぐれて、子どもを笑顔で迎える事ができればいいと思います。親子遊び拡大教室「こあら」は市の健康支援課の事業ですが、毎週1回児童館の中で行われています。乳幼児検診で気になる子を保健師がお誘いし、臨床心理士が親の悩みなどを聴きながら、児童館の職員が遊びの中で子どもの発達を促しています。6か月クールが終わっても、親同士で児童館の広場へ繋がり遊びに来てくれます。



始め、現在、6名で3回のプログラムを計画しています。産婦人科や市の母子推進員、市の健康支援課などへ、協力の依頼も進めています。Kさん

と「やっと進み始めてどきどきするね」といいながら、楽しんで準備をしている最中です。

NPとの出会い

そんなとき原田先生（本会代表）の「大阪レポートと兵庫レポート 子育て支援の潮流」に出会いました。20年前の子育てと比べ、子育てに悩む親の姿がデータで表され、子どもに関わった事もないまま親になり、相談する人もなかった私もその中の一人だったに違いありません。そこでNP (Nobody's Perfect)を知り「完璧な親なんていない」プログラムに惹かれました。2年ほどファシリテーターの養成講座を受けに行きたいという思いを暖め、やっと平成21年に大阪でNPファシリテーター養成講座を受ける事になりました。講座を受けながらNPのむつかしさの壁に当たりながらも、子育て中の親に必要なプログラムであると思いました。その後、沖縄でNPを開催しようと思いながら、一緒にプログラムをする方を見つけられずにあせっていました。

「BPファシリテーター養成講座」を沖縄で開催

今年度「沖縄県地域子育て創生事業」の助成金が出る事がわかり、「プログラムをする人が見つからないなら、沖縄で多くのファシリテーターを養成して、プログラムをする人を増やせばいい！」と思い、KKI事務局へ連絡を取りました。ちょうど去年からBPファシリテーター養成講座が始まっていたので、事務局の勧めもあり「BPファシリテーター養成講座」の助成金を取り、今年9月に開催する事ができました。

2日間のBPファシリテーター養成講座の中で、赤ちゃんとのふれあいや、親同士の仲間作りをするためのBPファシリテーターの役割など、子育てが初めての親にとってとても大切なプログラムだと思いました。養成講座はとても気持ちよく、講座を受けた23名がこれからBPを始める大切な仲間となりました。終了してからすぐに、「早くBPをはじめましょう」「自分が求めていた支援です」とうれしい声が届き、「沖縄でBPは広がる！」と思いました。児童館で発達障がいのある親の会で会長をしているKさんは、さっそく市の助成金を申請し「BPプログラム」を開催する準備を

「自分を好きな子」に

私は子どもを「自分を好きな子に育てたい」と思いました。それは自分を好きではなかった事が一番の理由でしたが、自分を好きな子に育てるにはどうしたらいいのかを周りのお母さんたちから学びました。赤ちゃんをぎゅっと抱いて「大好きよ」「世界一好きよ」と言っているお母さんを見て、私にはとても違和感がありました。私は自分から子どもをぎゅっと抱きしめられないことに気づいたのです。「これかもしれない」と思い、長女をぎゅっと抱きしめる自分に妙な感じを受けながらも、何度も繰り返しているうちに、不思議な事に「愛おしい!!」という思いが込み上げてきたのです。そして、いつの間にか私も子どもから愛情をもらっている事に気づきました。

子どもをぎゅっと抱きしめられない親はいるのです。学童期の子どもたちを見ていて、自己肯定感が育っていない子が多く見受けられます。泣きながら「死んだ方がいい」という小学1年生。ちょっとしたことでも怒りを爆発させる子。学校から帰ると職員にべったりくっついている子などを見ると、「お母さんぎゅっと抱きしめて」と言いたくなります。

児童館でBPプログラムを取り入れる

これから、児童館で年間計画の中にBPプログラムを取り入れていきたいと考えています。BPで仲間づくりをした親同士が、児童館の広場でつながり続けられるように支援をし、一緒に子どもが育っていくのを見守っていただけたいと思います。児童館は無料で利用できる児童厚生施設です。家庭環境が大変な子どもたちも見えてきますが、そんな時「BPを受けていたら少しは子育てが変わっていたのではないかと話す事があります。「自分が好き」と言える子が増え「思春期に花開く子育て」が実るよう、23名の養成講座を受けた仲間と繋がりながら、沖縄でBPプログラムをどんどん広げていきたいと思っています。